

鼎談 三谷和合を語る

深 考 § 随 想

峯 尚志

第69回日本東洋医学会学術総会 の シンポジウム8

「鼎談 昭和漢方の風雲児 三谷和合先生を語る」

2018年6月8日 大阪国際会議場グランキューブ大阪

中田敬吾 / 三谷和男 / 稲井理仁 / 峯尚志による座談会の記録です。



目次

序 開演 —— 鼎談のはじまり

一 和合先生がなしたこと

二 患者とどう対峙したか

〔幕間〕ある往診先での偶然の出会い —— 患者Aさんの記憶

三 弟子をどう育てたか

四 漢方医学の学び

五 人間・三谷和合

六 後世に遺したもの

結 私たちの中にある三谷和合の姿

開演

それでは鼎談 三谷和合を語る を開始させていただきます。

朝の三谷和男先生の特別講演に引き続き

このシンポジウムでは、生身の三谷和合先生の姿を紹介してゆきたいと思います。

演者は三谷和合先生から直接教えを受けた弟子である私と、三谷和男先生、

それから私たちの大先輩である聖光園細野診療所理事長の中田敬吾先生です。

この鼎にもう一本、和合先生の姿を、患者さんを通して、知る機会に恵まれた若き、そして熱き在宅医療医である、稲井理仁先生を加えて語っていただきたいと思います。

進行は、私、峯尚志が務めさせていただきます。

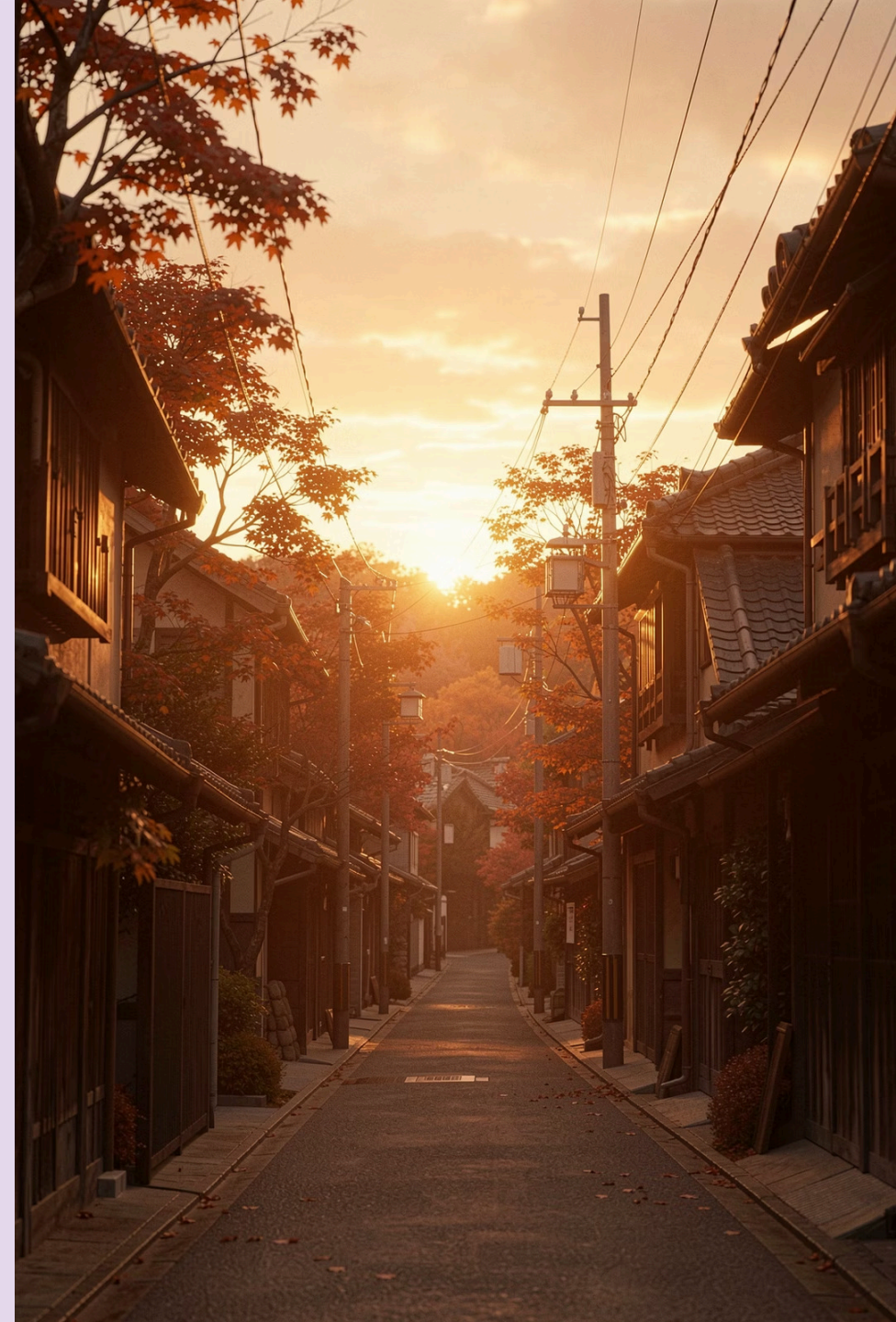
平成9年〔1997年〕9月14日

「残念や、まだやりたいことがたくさんある」

という言葉を残して

三谷和合先生は
自ら開設した加賀屋病院で最後の時を迎えられました。
69歳でした。

その言葉は、亡くなった後も私の心にずっと残り
和合先生のやりたかったことはいったいなんであっただろうか
やり残したことはなんだったのだろうか
残された私たちがやるべきことはいったいなんだったのだろうか
ということを考え続けるきっかけになりました。



一 和合先生がなしたこと

加賀屋診療所 開設

昭和38年8月、三谷和合先生は
加賀屋診療所を開設されまし
た。先生35歳のときのことで
した。

□ 昭和38年（1963
年）、漢方医療の新た
な拠点が大阪に誕生し
ました。



和合先生がなしたことは 単に日本の医療に漢方を とりもどすことだけ だったのだろうか

和合先生は、まだ世の中に漢方が認められていないとき漢方を一生の仕事ときめ漢方の保険収載や日本医学会への加盟に尽力されました。

和合先生の言葉から足跡をたどる

この鼎談では
和合先生の足跡をそばにいた弟子として
ここにのこる和合先生の言葉からたどりたいと思います。

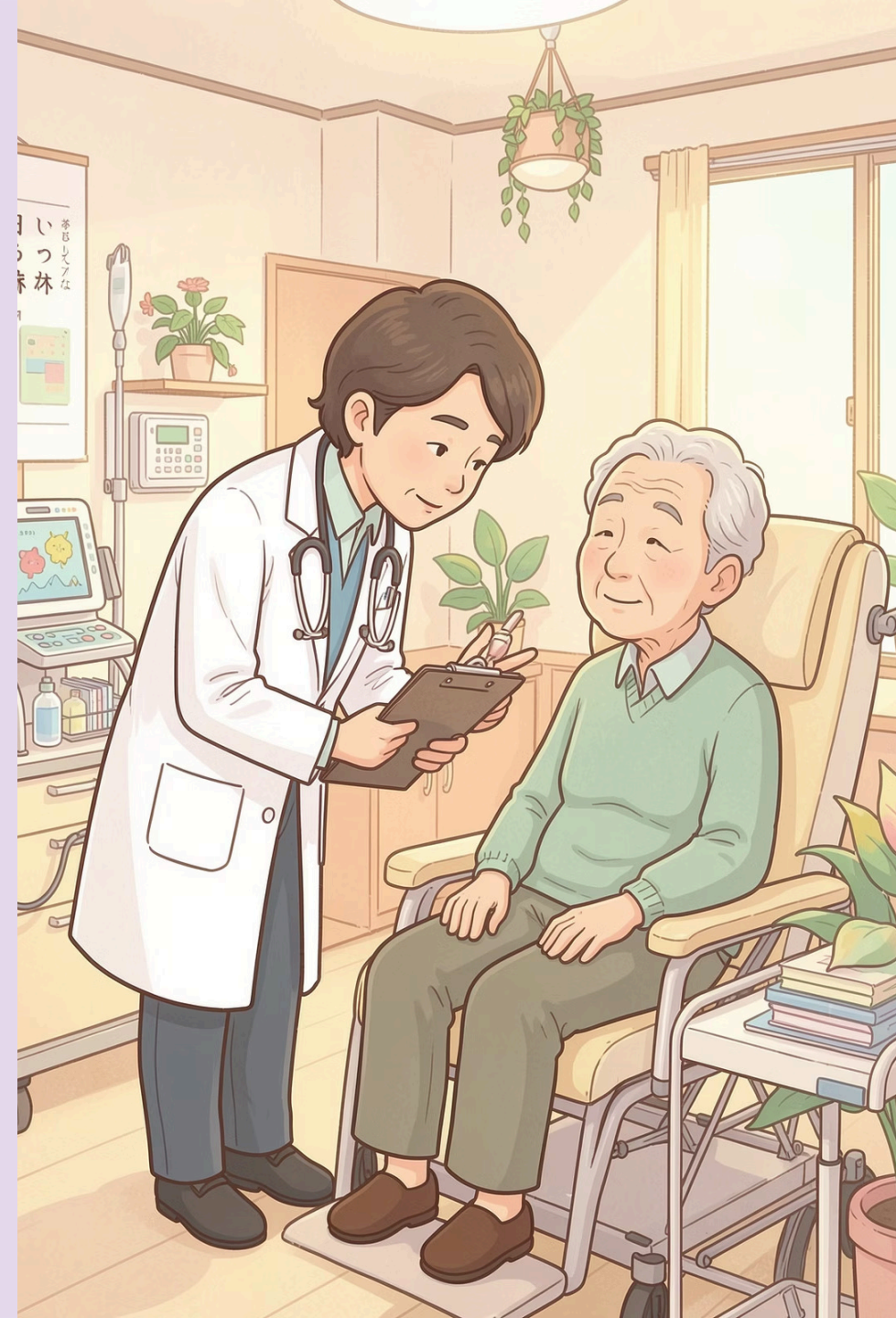


若き日の和合先生

二 患者とどう対峙したか

足の指先から頭のとっぺんまで 臨床家

和合先生はたくさんの論文をかかれましたが
足の指先から頭のとっぺんまで臨床家でした。
和合先生は患者さんにどのようにむきあったのでしょ
うか



患者「先生、リウマチで足が痛いんです。薬を飲んでもおさまりません」
和合先生「どんな靴はいてる？ はいてる靴みせてみ」

「この病気になるひとはなあ、みんなまじめで几帳面なんや
でもがんばりすぎたら病気を悪うするで、
部屋はなあ、四角う掃いたらあかんで、まるう掃きなさい。」

患者さんが訴える症状の言葉だけでなく、その人の生活そのものを診る。靴の減り方、歩き方、日々の労働の痕跡——すべてが診断の手がかりとなります。これが和合先生の望診の真髄でした。

地域の労働者を診る

「この地域の労働者は頸椎の6番から胸椎2番までの筋肉が手拳大に盛り上がってる。」

和泉市父鬼町での医療奉仕活動。農村・山林労働者の診察と健康調査

和合先生は整形外科医ではありません。
労働者の生活環境や身体の癖にいたるまで
詳細な観察をされていて、
病気の成り立ちを考え、
病人さんをなおすヒントを常にかんがえておられました。



ある夜の出来事

和合先生はスタッフといっしょに居酒屋で食事をしていました。
夜の8時ごろだったと思います。

「ちょっと待って、昼間の患者さんに言い忘れたことがあった。今から
ちょっと、患者さんの家に行ってくるわ」

常に患者さんのことが念頭にあり、思いついたら即行動でした。

患者さんの借金何ぼ 仕事や家庭で苦勞していること

患者さんの生活の様子、抱えている問題まで和合先生はご存知でした。

一日の多くの時間、私たちは一緒の時間をすごしているのに

いつそんな情報をしっているのか、若いころには不思議に思っていました。

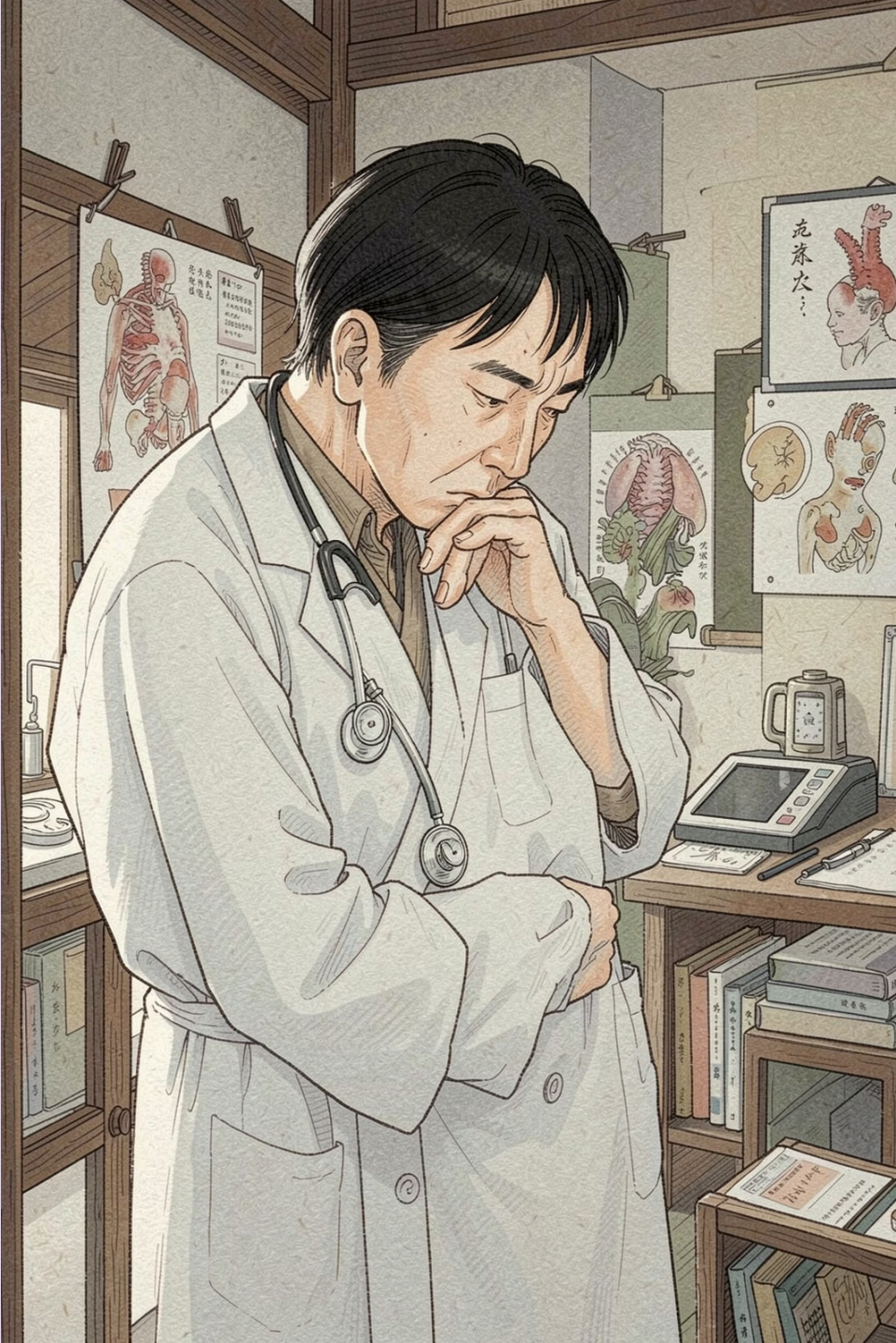
いまでは、若い私たちには言わないことでも、患者さんたちは和合先生には、ぼそぼそっと自分のことを話していたであろうとおもいます。

それだけの聞く器のある人でした。

先入観をもたずに一から深く考える

患者さんにおこっているどんなことも、先入観をもたずに一から深く考える——これが三谷和合先生の診療の根本姿勢でした。既成の概念や慣習に縛られることなく、目の前の患者さんという存在に真摯に向き合います。その姿勢が、先生の医療を特別なものにしていました。

次にその1例を紹介します。



リウマチで寝たきりの入院患者さん

「先生、うちの主人はひどい男です。私に、夜寝るときはオムツしてくれというんです」

リウマチで寝たきりとなった患者さんが、診察室で先生に打ち明けた言葉です。その言葉の奥に、どれほどの苦しみと無念さが秘められていたか。先生はその声に、静かに耳を傾けました。

患者さんの訴え

「私が人一倍清潔好きなのは主人は知っているのに。私はオムツなんか絶対にしたくない。夜中でもトイレにつれていってもらって、自分でしたいんです」

その時、和合先生は一瞬息を飲み、口を真一文字に結んだまま、長い時間じっと黙っておられました。それは1分だったかも知れない、3分だったかも知れません。ただ陪席していた私にとっては1時間にも感じる長い時間でした。

そして、長い沈黙のあと、ついに先生は口を開かれました。

和合先生の答え

「オムツしなさい」

患者さんの気持ちを十分に受け止めた上で、先生は毅然として答えられました。

「わかりました」

患者さんは、先生の言葉を受け入れました。その短い返答の中に、先生と患者さんの間に築かれた深い信頼関係が凝縮されています。

先生は夫婦2人のこれまでの人生と想いを、深く受け止めて、その判断の責任を自ら毅然と負われました。

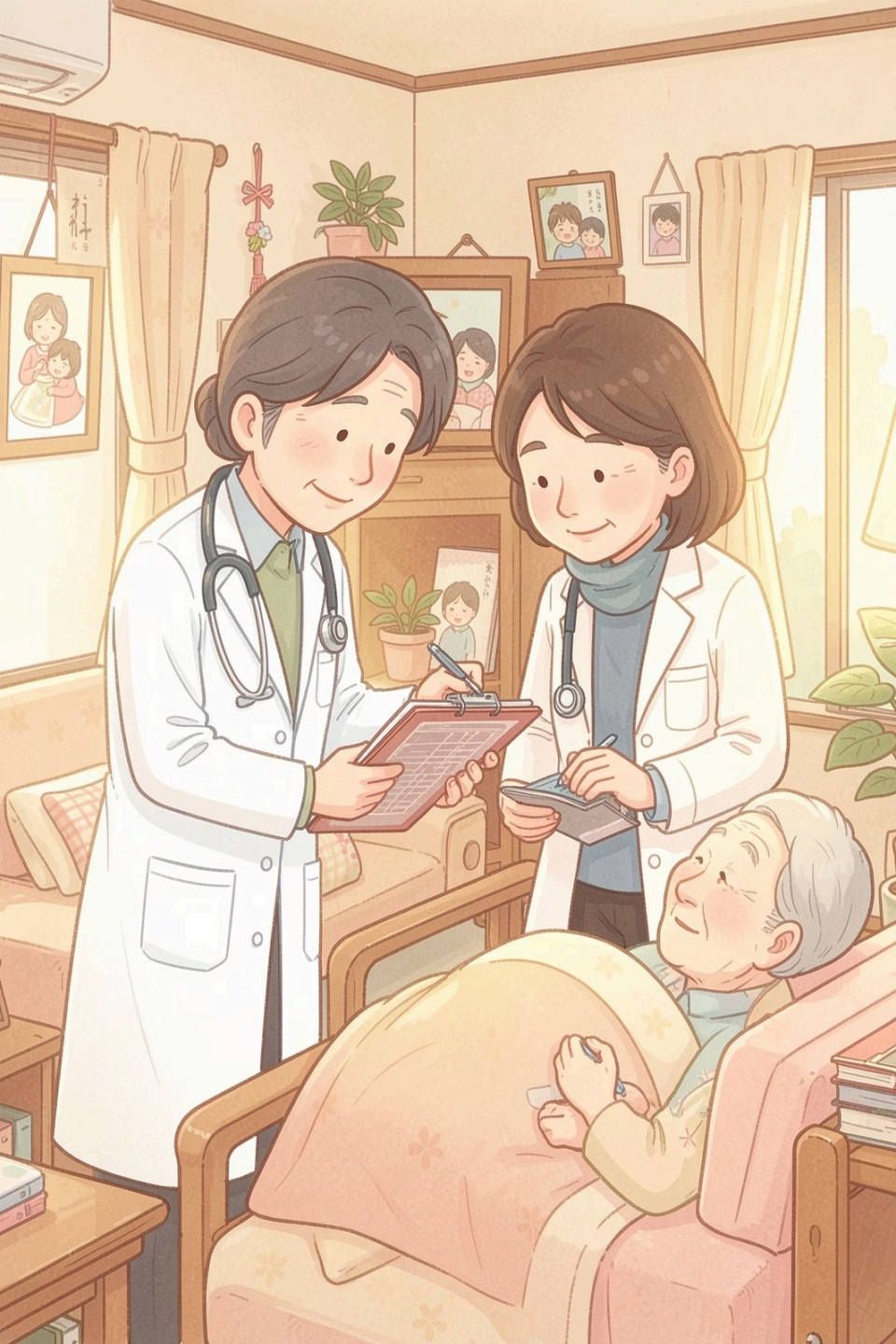
私はこの時の沈黙を一生忘れることはできません。
特別な話ではなかったかもしれませんが

そのころの若くて何もない自分にとって
これからの自分の道標になるような沈黙でした。
この人なら信用できる
この人の教えをうけていこうと
ここに決めた瞬間でした。



幕間 —— ある往診先での偶然の出会い 稲井理仁

和合先生を知る人の話を、思いがけず患者さん自身から聞くことになる。



在宅医療の現場で——偶然の出会い 語り部 稲井理仁

峯先生から在宅医療の現場を見学したいとの申し出があり、診療に同行いただいた日に、かつて三谷和合先生の診療を受けた患者さんと偶然、出会いました。

その出会いは、単なる偶然ではなく、先生の医療の精神が時を超えてつながった瞬間であったかもしれません。

往診先

95歳 女性 Aさん

年齢・性別	95歳 女性
病名	認知症（レビー小体型）、廃用症候群、パーキンソン症候群、逆流性食道炎、片頭痛
経過開始	X-5年よりホームケアクリニックで診療を開始しました
当初の状態	室内歩行可でした
転機	X-1年12月初旬に自宅で転倒し、左大腿骨頸部外側骨折を発症し、寝たきりとなりました



患者宅を訪れて

以後、体力の衰えが顕著となり食事量も低下していたX年2月に、私と峯先生が患者宅を訪れました。

室内はピーンと張りつめた空気が漂い、部屋の隅々まで整理整頓、掃除がいき渡っている家であった。

その空間そのものが、Aさんという人物の本質を語っていました。

望診による洞察

「大変、聡明な優秀な方ではなかったですか？」

患者さんを見て、峯先生が主介護者である娘さんに問われた言葉です。

娘さんの答え

「母は女学校を首席で卒業しました」

望診によって、患者さんの過去と本質を見抜く——三谷和合先生から受け継がれた診察の精神が、ここに息づいていました。

こめかみのマッサージ

診察の中で、峯先生はこめかみを優しくマッサージするよう娘さんに説明されました。

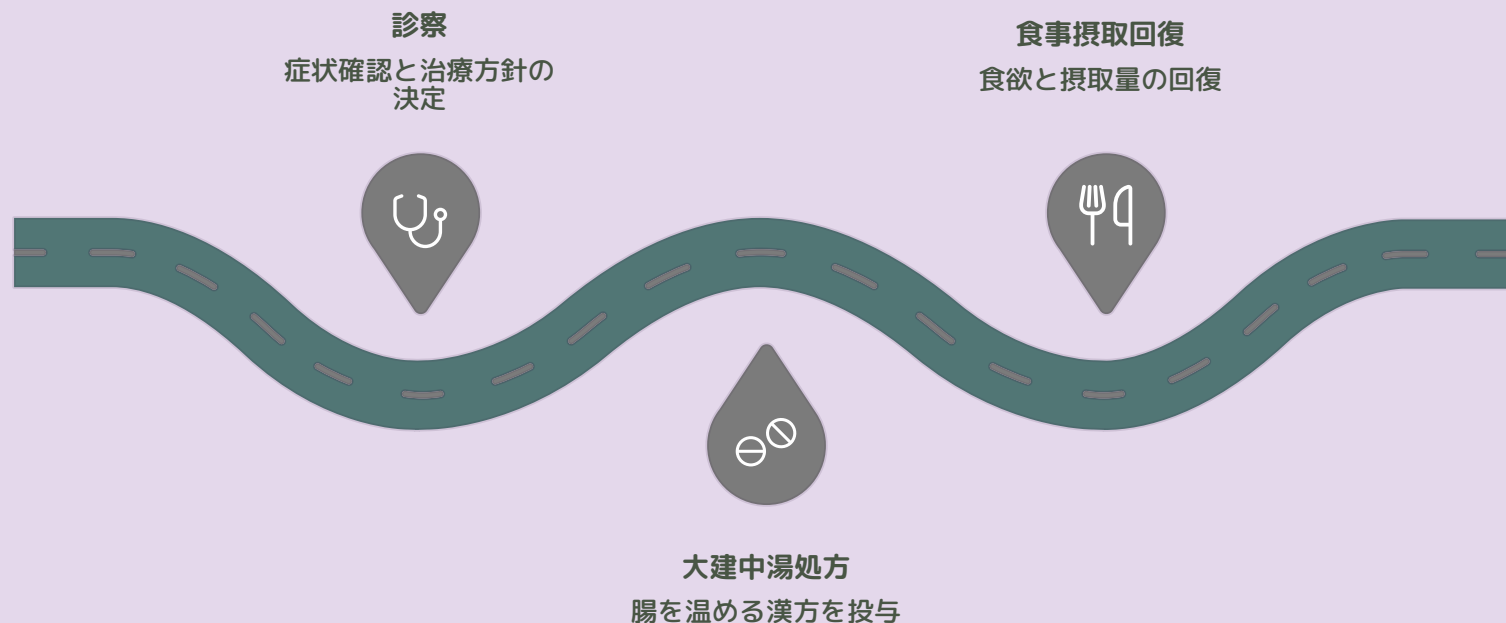
その所作の中に、漢方医学の知恵と、患者さんへの深い配慮が込められていました。薬だけでなく、触れること、関わること——それもまた医療の本質です。

- こめかみへの刺激は、頭痛の緩和や血流改善に効果があるとされます。和合先生もかつてAさんのこめかみに鍼を打っていたことが、あとになってわかりました。

峯先生は頭の緊張をとるためと説明されました。



大建中湯の処方



診察を終え、大建中湯の処方を提案されました。16時頃に大建中湯1包を服用したところ、その夜から、今まで摂れなかった食事が摂取できるようになりました。

□ 大建中湯は腸の働きを温め、消化機能を助ける漢方薬です。その即効性に、娘さんは大変驚かれました。

三谷和合先生との縁

「峯先生と言えば、かつて診察を受けていた三谷和合先生のお弟子さんではないか？」

何より驚かれたのは娘さんで、すぐに東京在住の兄へ報告したところ、このような話になったそうです。時を超えた師弟の縁が、患者さんの家族の記憶の中で鮮やかによみがえった瞬間でした。



一時の回復

食事量が増え体調は一時、上向きましたが、再び老衰が進行し、同年6月14日に永眠されました。

最後の訪問

1週間後に峯先生とともに患者宅を訪れた際に、ご家族から三谷和合先生に関するエピソードを教えてくださいました。

□ Aさんのご逝去から1週間後、先生の足跡をたどる新たな物語が始まりました。

初診の記憶——昭和41年

昭和41年、夫と祖母を同時に亡くされたことを契機にうつ病と顔面神経麻痺を患い、当時通院していた病院から三谷和合先生を紹介されたのが初診でした。

先生が開業されて3年目と記憶している——Aさんの長男さんが語るその言葉に、半世紀以上前の記憶が鮮明に刻まれていることが伝わってきます。



トロリーバスで通院

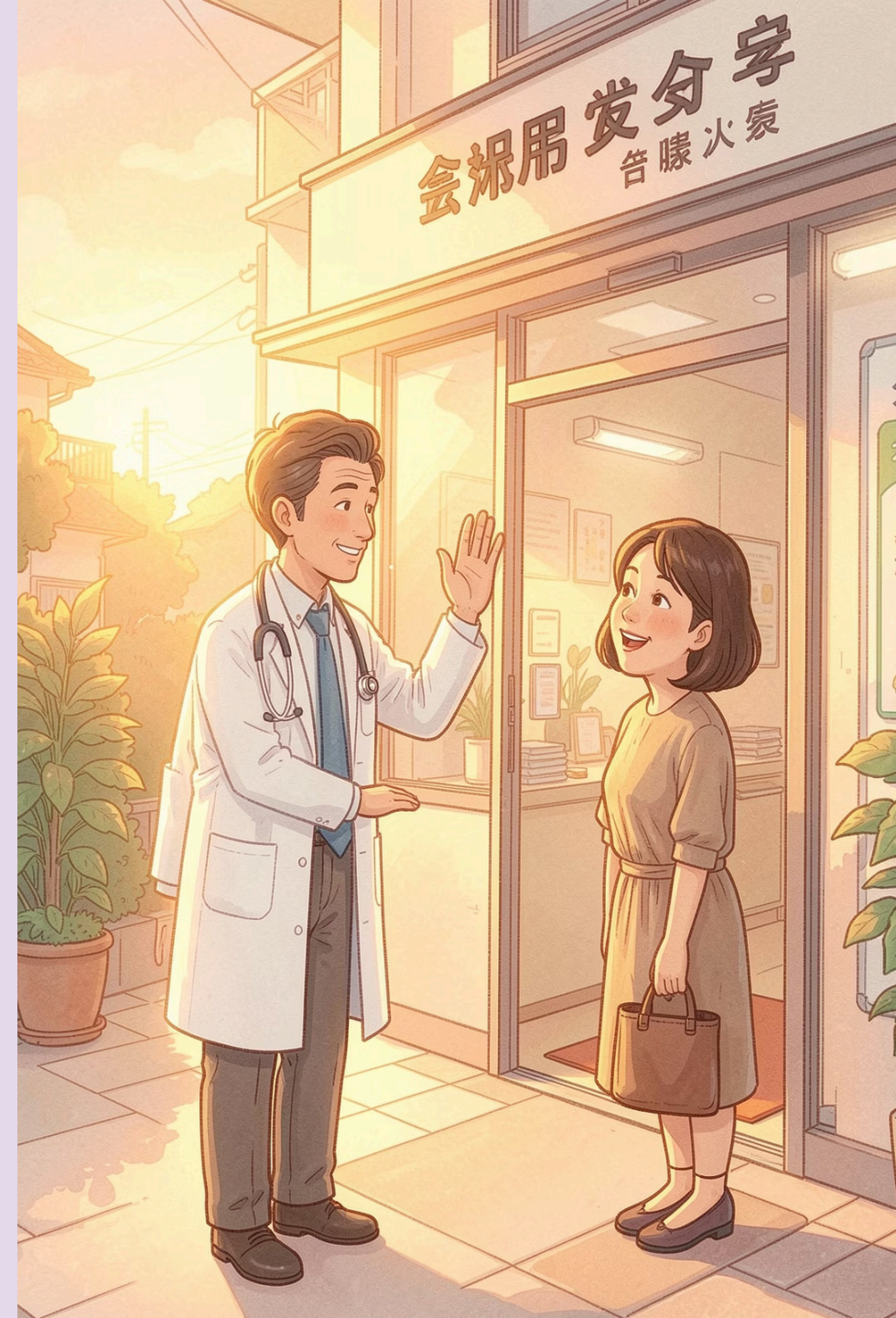
豊中から診療所までトロリーバスで通院していましたが、和合先生から治安が悪いので、「明るいうちにきて、暗くなる前には帰るように」と説明を受けていました。



見えなくなるまで、手を振って見送る

診察が終わると、Aさんが診療所から見えなくなるまで、和合先生は手を振って見送りをされていたそうです。

その姿に、三谷和合という医師の本質が凝縮されています。患者さんを送り出すその瞬間まで、先生の心は患者さんとともにありました。



Aさんの記憶の中の和合先生

声が大きい

豪快で、よく笑う先生であ
ったと記憶されていました。

鍼も打つ

診療所では湯液だけでなく、こめかみに鍼を打って
もらったことがありました。



キノコを干す診療所

診療所ではキノコを干していたが、急に雨が降り出し、キノコを室内へ取り入れる手伝いをした記憶がある。

Aさんが語るこの小さなエピソードに、当時の診療所の温かな雰囲気浮かび上がります。医師と患者の関係を越えた、人と人との自然なつながりがそこにありました。漢方の素材を自ら管理し、生活の中に医療を溶け込ませていた先生の姿が目には浮かびます。



傷寒論を読むAさん

Aさんはハルピン生まれで10歳頃まで中国で生活をして
いたため、普通に漢文を読むことができ、和合先生か
ら傷寒論や雑病論を渡され読んでいたようです。

❏ 傷寒論・雑病論は漢方医学の根本をなす古典で
す。患者さん自身がその原典を読むことを勧め
た先生の姿勢に、「病気は自分でなおすもん
や」という信念が表れています。

患者さんにも素養がある人には勉強させる和合
先生でした。

約10年後の再会

母は診療所には約1年通院しました。約10年後に再び体調が悪くなり連絡したところ、和合先生と直接、電話で話をすることができ、名前を伝えると「ああ、知っている」と答えられました。

10年の歳月を経ても、先生はAさんのことを覚えていました。



立派な病院になっていました

受診のため来院すると、以前の診療所と違い立派な病院になっていたことをAさんは大変喜ばれていました。

スリッパの音だけで帰宅

院内をペタペタとスリッパを鳴らして歩かれる和合先生の後姿を見ただけで受診せず帰宅したそうです。

「もうだいじょうぶ」

先生の後姿を見ただけで安心し、帰宅できた——それほどの信頼と安心感を、先生はAさんに与えていたのです。



Aさんが知っていた苦勞

Aさんは和合先生の苦勞をよく知っておられたとのこと
です。これらのエピソードはすべてAさんの長男さんか
らお聞きしたものです。

- ❏ 患者さんが医師の苦勞を知り、医師が患者さん
の苦勞を知る——その相互理解の中に、三谷和
合先生の医療の真髓がありました。

患者会をつくる 「病気は自分でなおすもんや」

「自分の病気のこととは自分で知らんとあかん」

三谷和合先生は患者会の設立を推進されました。患者さん自身が自分の病気を理解し、主体的に治療に関わることを先生は強く求められました。医師に依存するのではなく、患者さん自らが病気と向き合う——その思想が患者会という形で結実しました。



患者自らが運営する患者会



高血圧患者会

高血圧を抱える患者さんたちが集い、互いの経験を共有し、自らの健康管理を学ぶ場です。



腎炎患者会

腎炎患者さんが自らの病気を深く理解し、日常生活の中で適切な対処ができるよう支え合う会です。



リウマチ患者会

リウマチと闘う患者さんたちが、痛みや不安を分かち合いながら、前向きに生きるための会です。

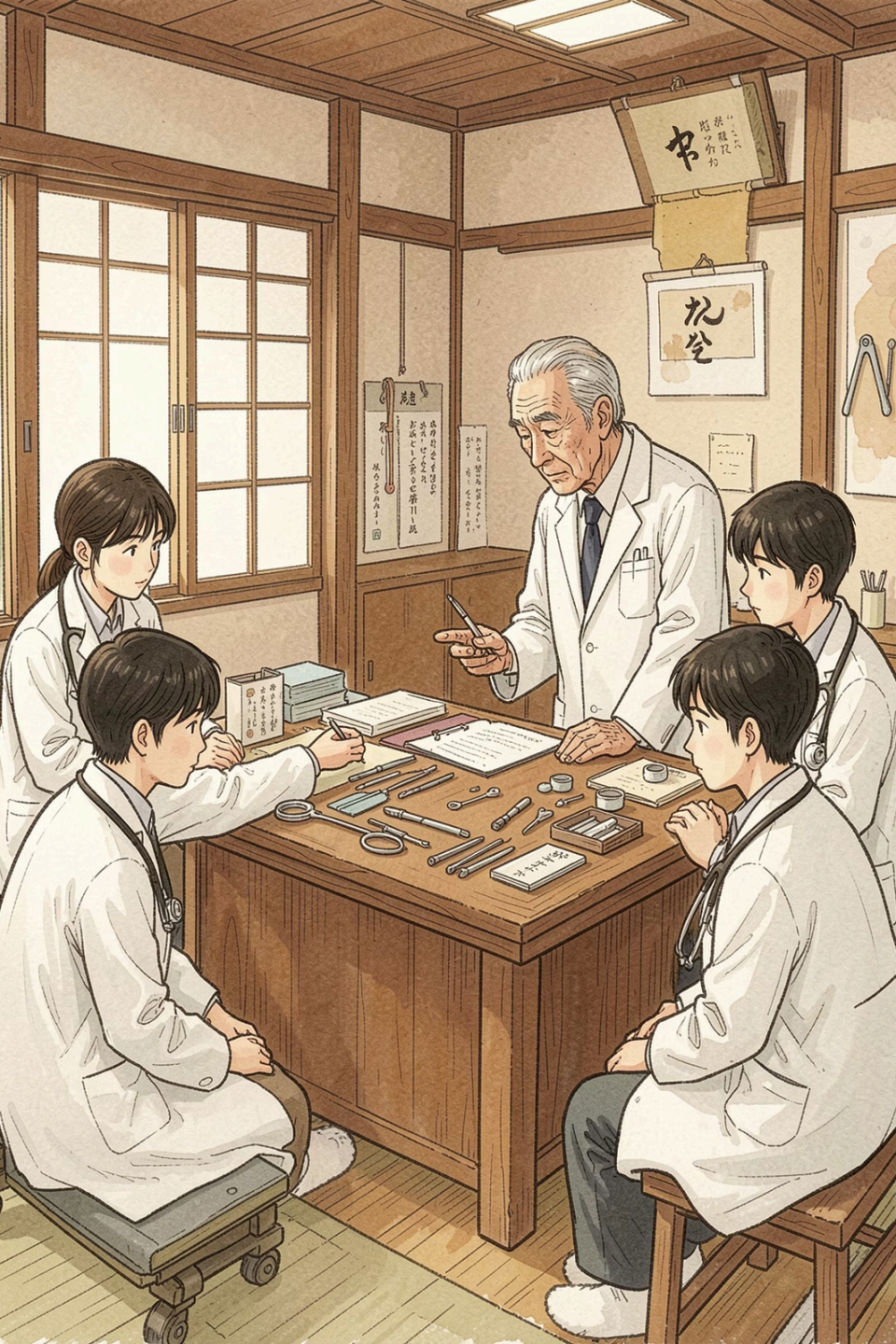
いずれの患者会も、患者さん自らが運営する点が特徴でした。先生はその場を作り、患者さんの自立を促しました。

鼎談へ戻る

Aさんの記憶に残る診療は、和合先生が貫いた患者さんとの向き合い方そのものでした

稲井先生 お話ありがとうございました。

三 弟子をどう育てたか



鋭い言葉と実践、魂の鍛錬

三谷和合先生は、多くの弟子を育てました。その教育の方法は、教科書的な知識の伝授ではなく、鋭い言葉と実践を通じた魂の鍛錬でした。先生の言葉は時に厳しく、時に深く、弟子たちの心に刻み込まれました。

和合先生の言葉

「君の漢方は、君の着ている服と一緒にやな」

弟子の離脱

その言葉を受けた弟子は、漢方をやめました。

「君の着ている服と一緒に」——それは、漢方が本当に自分のものになっていない、表面だけを纏っているに過ぎないという、鋭い指摘でした。先生という言葉は、弟子の本質を見抜き、その魂を揺さぶりました。

❏ 厳しさの中にある愛情——それが三谷和合先生の教育の本質でした。愛情が伝わなかった弟子は去って行きました。

「君はなんのために漢方を勉強しにきたんや。漢方でうまい飯が食えると思ったら大間違いやぞ」

漢方を学ぶ動機を問う、先生の根本的な問いかけです。生活のため、名声のため、収入のため——そのような動機で漢方に向き合うことへの、先生の厳しい警告でした。漢方は手段ではなく、道だと言いたかったのかもしれない。



「開業するために漢方でもいうて学びに来たんと違うやろな。それなら君は漢方使いというやつや」

「漢方使い」——先生が最も戒めた言葉です。漢方を道具として使う者と、漢方を生きる者との違い。先生はその違いを、弟子たちに厳しく問い続けました。

[illegible]

病気をみるんやない病人をみるんや

——三谷和合先生の医療哲学の核心をなす言葉です。

診断名や検査数値ではなく、その病気を抱えて生きている人間そのものを見ます。その人の生活、苦しみ、喜び、希望——すべてを含めた「病人」を診ることが、真の医療であると先生は説きました。



本音を聞く医療 語り部 三谷和男

「先生、この患者さんにはどんな処方がい
いんでしょうか」

弟子が処方を尋ねると、先生は問い返しまし
た。

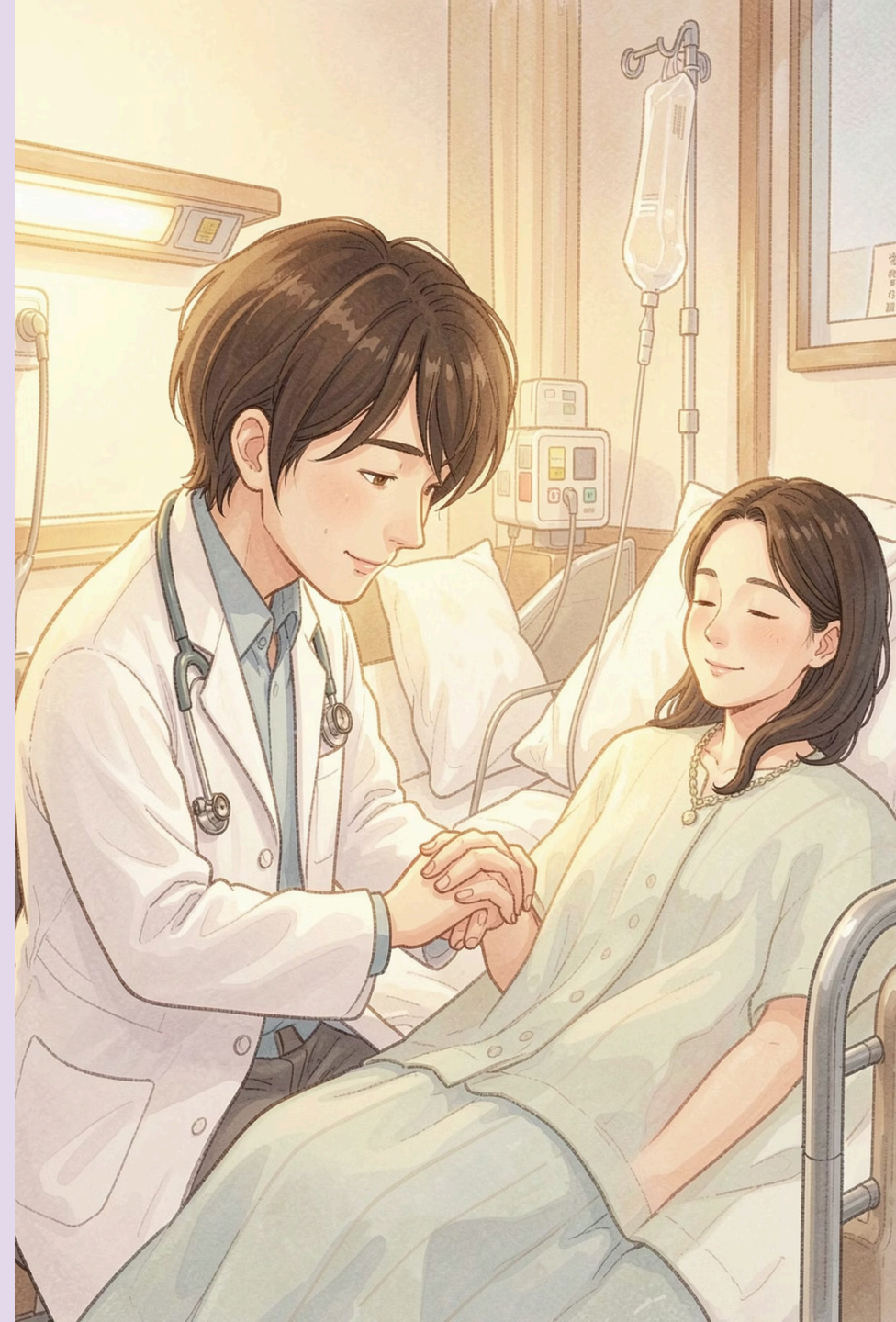
「病人さんの家庭状況、今抱えている問題
をちゃんと聞いてあげたか」

処方よりも先に、患者さんの生活と問題を聞
くこと——それが先生の教えでした。薬は後か
らついてきます。まず人として向き合うこと
が先決です。

「薬なんか、あとあと。本音を聞いたげなあかんで」

三谷和合先生が弟子たちに伝えた、最も大切な言葉です。

薬は後でいい。まず患者さんの本音を聞くこと——その姿勢こそが、先生の医療の根幹であり、弟子たちへの最大の遺産でした。



四 漢方医学の学び

ある日の症例検討会

研修医：カンファレンスを始めます。患者さんは42歳男性です。膝と腰の痛みを主訴として来院されました。既往歴は32歳の時に虫垂炎があります。よくアルコールを飲まれる方で、軽度の肝機能障害があります・・・（まずは西洋医学的な所見とその対策をおさえます）。東洋医学的には、脈状はやや浮・緩、舌所見は厚い黄白浄苔が覆っており、舌質は紅色です。腹証は、高度の胸脇苦満を認めます。

指導医：よし、君らはここで何を考える？

研修医：（てっきり処方を問われたものと思い、自信を持って）「はい、舌所見より熱・実の所見があります。腹証をあわせて考えると大柴胡湯の適応と考えました」と答えた。

指導医の叱責

「おい、漢方の何を勉強しとんのや？もう一度聞く。この症状はどこからきてるんか考えてみい！」

「あほ！あのなあ、いつもゆうてるやろ。この人の日常はどうなんや。奥さんはこの症状をどうみてるんや。○△製鋼に勤めてるということやけど、具体的な業務はどんなことやってはんねん？」

「君らなあ、二言目には○○湯がいいんじゃないですか？△▽散でしょうか？もう、薬のことばっかりやないか。そんなんいらんねん。ええか、病人さんは一人で生きてるんやないで。診察室の所見だけで考えてどないすんねん。お前、明日から○△製鋼所に行って、その人の日常を見てこい！」

——ということで、私はその会社に奉公（？）にだされました。

工場で目の当たりにした現実



そこには想像を絶する過酷な職場の状況がありました。

- ❑ 正しく「証」を把握し、もっとも適切なお薬を出すことは大前提です。しかし漢方診療の醍醐味は、その先——つまり「何を治療対象とするか？」にあります。

抗生物質の少量療法

西洋薬も証にしたがって使うんや

漢方の思想は漢方薬だけに適用されるものではありません。西洋薬であっても、患者の「証」を見極めた上で用いることが、真の治療につながります。



討論も真剣勝負 ライバルは聖光園細野診療所

医学の進歩は切磋琢磨から生まれます。真剣な討論と競い合いの中でこそ、漢方医学の本質が磨かれていきます。



社会に対していどんだ姿。

周礼という書物に「上医は国を治す」ということばがありますが、和合先生は病気が治るためには社会も変わらなければならないと考えておられました。そしてひとりでも社会の矛盾に立ち向かう気迫を持った人でした。



無医村でまのあたりにした患者さんの 実像

脳卒中・左半身不随の69歳男性

発症当日のみ医師の往診を受け、以後4年間、リウマチとして医療を受けることなく寝たきりの生活を送っていました。

脊髄性小児麻痺の小児

乳児期に発症しました。親は山仕事で外に出るため、子どもの面倒を充分に見られず、いつも静かに寝てくれている子でよかったと思っていました。3歳を過ぎてようやくおかしいと気づき、医師の診断を得て驚きました。その後は懸命に面倒をみましたが、麻痺は固定してしまい治療の時期を逃していました。



病院で守りに入った治療をするのではなく、患者さんの生活を知らないとほんとうのことはわからん。

診療所は患者さんに近い存在

患者の日常に寄り添う場所としての診療所の役割を再定義します。

医者が生活の中に出て行く

診察室に患者を呼ぶだけでなく、医者自らが患者の生活の場へ踏み込む必要があります。





外来が終わったら看護師は患者さんの生活する家を訪問するんや

診察室での診療が終わっても、医療は終わりません。患者の家庭に足を運ぶことで、初めて見えてくる生活の実態があります。訪問こそが、真の医療の延長線上にあります。

スパゲティ症候群にせんと漢方で最後まで患者さんをみとれる病院をつくるんや

□ 昭和54年11月 加賀屋病院開設。

無数の管につながれたまま最期を迎えるのではなく、漢方の力で人間らしく生き、人間らしく逝ける場所を作る——その信念が加賀屋病院の誕生につながりました。

その病院で私たちは死に向かいつつある患者さんを和合先生とともにみとってきました。また加賀屋病院の入院は、自分がどうして病気になったのか、どうしたら元気になるのか自ら学ぶための場所でもあり患者さんからは加賀屋学校と呼ばれていました。

古代の中国では高貴な男性しか治療を受けられなかった漢方が、一部の金持ちのためのものになったらいかん

漢方の歴史は特権階級のものとして始まりました。しかし三谷和合先生は、その恩恵をすべての人に届けることを使命とされました。医療は平等でなければなりません。



漢方が保険適応になったらみんなが平等に漢方が飲めるようになる。

保険適応という制度的な変革を通じて、漢方を一部の
人々の特権から、すべての市民が享受できる医療へと
転換させる——これが先生の描いた未来でした。



中国では食医は疾医よりえらかっ たんや

食事は治療の柱

加賀屋病院にあるのは
「栄養科」やなくて「食
養科」です。食べること
そのものが治療です。

先生の言葉

「お金のことは考えんでえ
えからいい材料を使いなさい」

食の質が命の質を決めま
す。病院食を単なる栄養補
給と捉えるのではなく、治
療そのものとして位置づけ
た先生の哲学がここにあります。



助産師さんに引き継がれた加賀屋の精神

患者さんから先日しみじみとした話を聞きました。

加賀屋病院に勤めていた助産師さんが一人でお産をとっている助産院があります。そこでお産をしたそうなんです

『お産をとったあと、それがどんなに夜中でも朝には、とんとんとんと包丁の音がして、朝、めしあがれ、と笑顔で助産師さんがごはんをもってきてくれるんです。食事がめっちゃ豊かでおいしい』『ほんとうに産後の肥立ちをかんがえて作られていた』

と患者さんがいっていました。

いまでも加賀屋病院の伝統がどこかで引き継がれていると思うとほんとうにうれしいことです。

五 人間・三谷和合

和合先生の素顔

このように熱い情熱をもって昭和の時代を駆け抜けた三谷先生ですが、ひとりの人間としての和合先生の姿を紹介したいと思います。



すし屋で脈を語る

脈診はなあ、切るのや 指先で脈を切るのや

すし屋でネタをつかむ手で——感覚をどこまでも大事にした。

脈診は単なる触診ではありません。指先の感覚を研ぎ澄まし、脈を「切る」ように捉えます。その繊細な感覚こそが、漢方診断の核心にあります。



いやいやあとは手酌で お銚子をコップにドボドボと

厳格な医師でありながら、人間的な温かさと豪快さを
持ち合わせていた三谷和合先生。その素顔は、診察室
の外でも生き生きと輝いていました。
和合先生は大の酒飲みでした。

一に養生、二に養生！ 三、四がなくて五に薬

□ 和合先生！先生も養生してくださいよ！

薬は最後の手段です。まず自らの生活を整え、身体を養うことが治療の根本です。先生自身もその言葉を向けられていました——人間らしい矛盾の中で。

三谷和合の慟哭

人間味にあふれて、お酒大好きの和合先生、
激動の昭和の時代に、和合先生が内心に抱えた孤独感
と慟哭とはどんなものだったのでしょうか。



『なんで治らへんねん』

診療室での姿

診療をしているときの和合先生はいつも自信満々。患者の前では揺るぎない存在感を放っていました。

自宅に帰られ書斎での姿

書斎の机につっぷして慟哭する和合先生——その姿は、誰にも見せない苦悩の深さを物語っていました。



目の前の矛盾、患者さんの苦しみ、未来に向けて思い描く医療のありようと現実との落差をいつもまのあたりにし、和合先生の苦しみに終わりはありませんでした。

理想を高く掲げるほど、現実との乖離は大きく見えます。その落差に目を背けず、正面から向き合い続けることが、三谷和合先生の生き方でした。

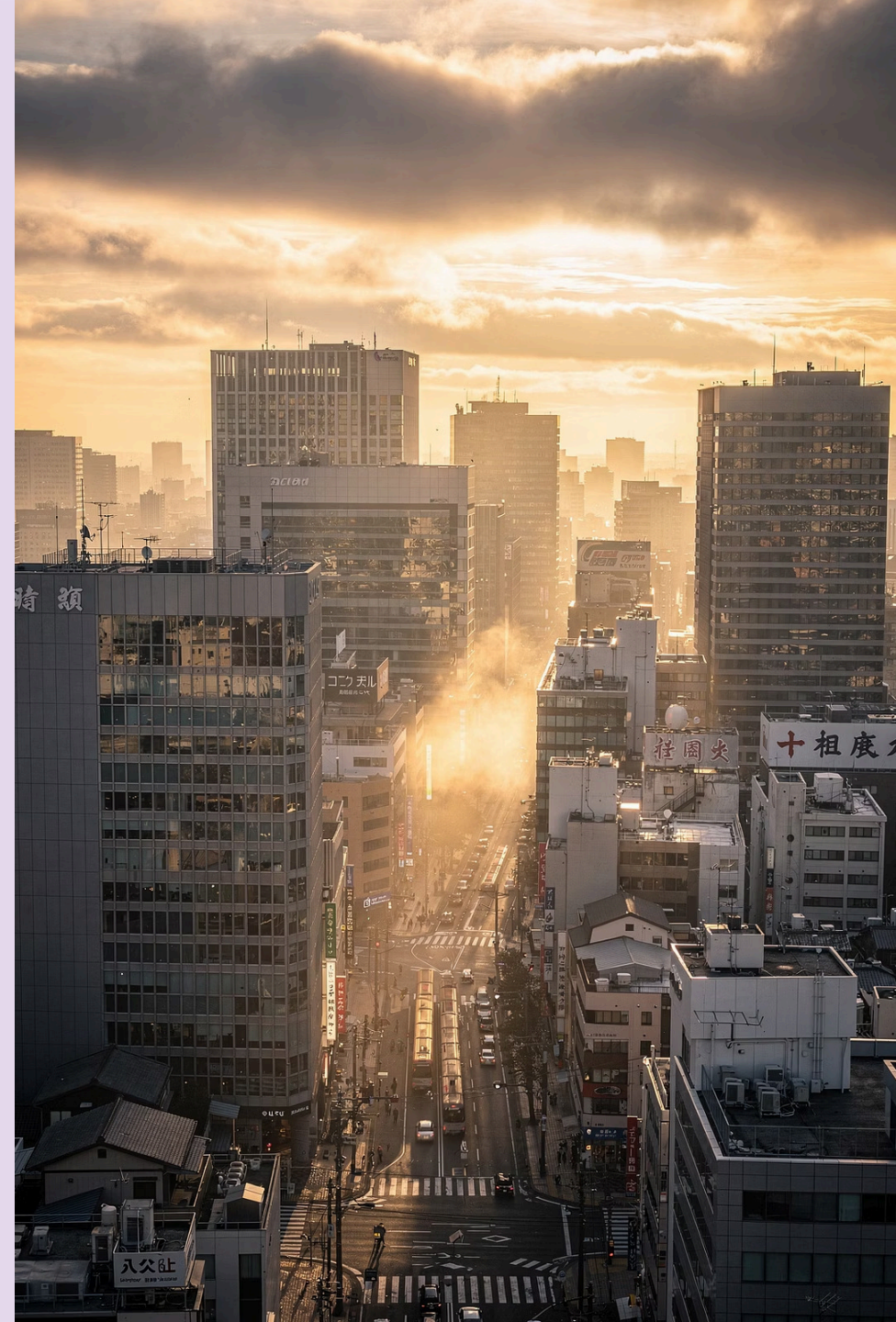
なんでそんなことになってんねん 常に時代の先をみすえるゆえに苦悩続きだった和合先生

時代の先を見通す眼を持つことは、孤独と苦悩を伴います。周囲がまだ気づいていない問題を見続けることの重さを、先生は生涯背負い続けました。

六 後世に遺したもの

しかし後世実現したこともあった

苦悩の中にも、先生が蒔いた種は確かに芽吹きました。時代が追いつき、先生の描いた未来が現実となった瞬間があります。



後世に実現したこと

和合先生は後世このような形でめざしたものが実現するとはおもっていなかったかもしれませんがこうであるべきだという姿は、すでに和合先生の頭の中にはあったのだと思います。



訪問看護

患者の生活の場に医療を届ける訪問看護が制度として確立されました。



介護保険

高齢者が尊厳を持って生きられるよう、介護保険制度が整備されました。



グループホーム

認知症の方々が地域の中で共に暮らせる場が生まれました。



労働環境の改善

過酷な職場環境の問題が社会的に認識され、改善への取り組みが進みました。

処方がちがうって？

昨日この症状にはこの薬だと先生おっしゃいましたよね

□ だから君たちはだめなんや

昨日考えてることと

今日考えてることが

同じなわけないやろ

人間は日々進化してるんや

昨日の正解が今日の正解とは限りません。固定した知識に頼ることの危うさを、先生は常に弟子たちに突きつけました。医療は生きた営みであり、常に変化する現実と向き合うものです。

世の中の常識だけでなく 自分自身の固定観念でさえ打ち 破る戦い

外の世界の常識に挑むことは難しいです。しかし最も困難な戦いは、自分自身の中にある思い込みや固定観念を打ち破ることです。三谷和合先生はその戦いを生涯続けました。



閑話休題

ここで少し立ち止まり、先生の哲学の核心へと向かいます。漢方医学とは何か、真実とは何か——先生が最後に辿り着いた言葉に耳を傾けたいと思います。

漢方は手段にすぎない

現実が存在するものこそ真実であり、真実を追究したい

漢方は目的ではなく、真実に近づくための道具です。
先生にとって大切なのは、処方や理論ではなく、目の
前の患者という現実そのものでした。

今日真実であったことは 明日には過去になり 新しい真実が見えてくるかもしれない

真実は固定されたものではありません。今日の正解が明日には更新される——その謙虚さと探究心こそが、医師として、人間として生き続けるための姿勢です。



自分自身ですら信用するな
目の前にあるものを
とらえようとする
自らの探究心のみを
糧として生きよ

第48回日本東洋医学会学術総会会頭講演 平成9年5月15日

死の直前、第48回 日本東洋医学会学術総会の会頭を、和合先生は末期の食道癌をおして引き受けられました。テーマは先生が生涯追求してこられた舌診についてです。舌診をただ所見だけに終わらせず、望診として患者さんの身体全体を捉える試みについて熱く語られました。このときすでに飲まず食わずであったうえに、高熱をだしておられ、もてる力を振り絞っての講演でした。弟子である私と三谷和男先生は、和合先生が倒れたときにそなえていつでも壇上に駆け上がる準備をして最前列に控えていたことを、昨日のことのよう思い出します。

この後、和合先生は、何度か外来にて患者さんを診療し、4ヶ月ほどの闘病ののち、平成9年9月14日に加賀屋病院で、私たちに看取られて、息を引き取られました。最後の最後まで外来診療を続けた三谷和合先生の生き様そのものが、言葉を発せずとも三谷和合の教えの真髄であると思います。

おわりに 私たちの中にある三谷和合の姿

私たちはまだ未熟で和合先生のような診察はできませんが

患者さんの脈を診るとき和合先生の、手や表情をいまでもありありと思い浮かべることができます。
日々の臨床の中で少しでも先生がみてきたものがみえるようになりたいと思っています。
そして先生が伝えてきた真実が、このシンポジウムを通して少しでも伝わって
皆さんの明日からの診療にいかされることをねがってやみません。

いつかこのような和合先生の姿を皆さんの前で語ることはわたしにとって長年の夢でした。

それがかなって本当にうれしく思います。

これでこの鼎談を終わります。